パリ・コミューン参加者の息子、フランスのアナルコ・サンジカリスト活動家、一八九五年生まれのガストン・ルヴァルは、一九二一年六月から八月の、第三回共産主義者インターナショナルに引き続いての、赤色労働組合インターナショナル創立大会に、スペインCNT代表として、出席した。モスクワでの滞在中、彼の注意は、投獄されているロシア・アナキストたちの運命の上にそそがれた。

多くのわれわれの同志たちが獄中にあることを知って以来、私は、レーニンの盲目的な手先、内務人民委員ジェルジンスキーと交渉するために、フランスの労働組合代表たちと相談した。私を信用せず、私の同僚の代表たちは、CNT代表団を代表するものとして、ホアキン・モオランを選んだ。モオランは、最初の会見の報告をした。われわれが釈放を求めた囚人たちのリストを読むと、ジェルジンスキーは蒼白になり、それから、これら

獄中のアナキストたち（一九二一年夏）

ガストン・ルヴァルによる

の人間たちは白軍の將軍たちと同盟した反革命派だ、と断言しつつ、真赤になって怒った。彼はまた、赤軍部隊を乗せていた列車を脱線させた、特にウクライナで、何千という兵士の死に責任がある、といって彼らを非難したのであった。

われわれは、そこで何が起きたのか、それほど遠くまで確かめに行くことはできなかった。われわれ代表団の中では、モオランとその仲間たちが勝ちを収めたのである。しかし、私は譲歩しなかった。それに、他の国のかりの数の代表たちも同様であった。われわれは交渉をつづけたのである。ジェルジンスキーの断定は、いかなる証拠物件にも、合法的な起訴にすら、もとづいていなかった。予審もなく、裁判もなく、裁判官もいなかった。弁護士について語られることもなかった。そんなものは存在しなかったのである。体制の擁護を任務とする《人民委員》が何をいおうと、問題とされているのは勝

手氣儘な拘禁であった。

われわれは懇願した。同僚の代表たちは、いかなる成功もありえないと考え、事件に関与しなくなり、結局、私が公式にそれに専念させられることとなった。党則の名によって果たさねばならなかった役割に明らかに悩まされていた、文部人民委員、ルナチャルスキーは、二度われわれに手紙を届けてきた。しかし、決定を下すことはできず、彼は、仲介に立つただけで、要求と回答とを受けとり、伝達した。彼のあとで、警察教育についての重要な神秘的な人物、ウルリッヒがわれわれに差し向けられた。しかし時間は無駄なものになり、いく週もが過ぎ去った。おそらくわれわれは放っておかれようと思われたのである。

私はしばしば、エマ・ゴールドマンとアレクサンドル・ベルクマンに会いにいった。彼らの二つの部屋には、夫たちが投獄されている同志である婦人たちが次々とやってきていた。不安にかられ、心を痛めていた彼女らは、時には泣いていた。人々は私に、社会主義的と称する国家の犠牲者たちの、数奇な運命と生活を物語った。時折、真面目に両天秤をかけていた、西欧の新聞に体制のための記事を書きつけていた、ヴィクトル・セルジュ自身、彼らのことについて私に教えた。マクシーモフは、反ソヴェト的サボターージュ行為のできない、誠実なアナルコ・サンジカリズムの理論家であった。ヤルチュックは、ジノヴィエフがケレンスキーから逮捕命令

を出されたとき避難していた、クロンシュタット・ソヴェトの書記であった。ヴォーリンは、その筋の宿敵であり、アナルコ・サンジカリズムの理論家であり、講演家であり、才能ある著作家であり、ツァーリズムに対する革命の際には国外に追放されていた。ある人々は当時獄中にあり、ある人々はシベリアに流刑にされていた。そして、今では、これらすべての正統的な革命家たちが、数年前にはマリア・スピリドノワのような彼らの中のごく一部の人が入れられていた、牢獄の中にうずくまっていたのである。

われわれは、彼らに面会する許可を要求した。われわれは当局が味方につけようとしていた労働組合組織の代表であるのに、それは拒絶された。私は、私がいかにやってきたアルフォンソ十三世のスペインにおいても、フランコ時代を除いてこの国が知りえた最も恐ろしい弾圧の一つの時期にも、面接禁止でさえなければ、人はいつでも囚人たちを訪ねることができたことを思いだした。パレンシアのモデルロ監獄でも、バルセロナの監獄でも、友人たちは難なく私を訪ねてきた。彼らには、私に訪問時間を見ただけで十分であった。そして、看守が私を面会室に連れていった。その後私が過ごしたスペインの村々では、私はいつも投獄されていた同志たちを訪ねることができた。レーニンとトロツキーのロシアではそれは不可能である。代表たちの大半は執拗にいい張らなかつた。彼らは、その上何をしたらよいのかわから

なかつた。しかし、私は被害者たちを放棄しなかつた。非難しただけでは不十分である。われわれに証拠は見せられなかつたし、当局の断言と食い違ひ、あまりに多くの有効な反駁があげられた。私は証拠を集めることにした。

私がエマ・ゴールドマンのうちで会った婦人の同志たちの中で、オリガ・マクシーモフは異彩を放っていた。三十歳で、背が低く、小さくて、くすんだ顔色で、試験のために疲れ果てていた。彼女が夫を知ったのは、ツァーリズムの下で夫同様に彼女がシベリアに流されていた時であった。彼女は、われわれの同志たちと話をするために、翌日ブーチルキ監獄に入ってみることを私に提案した。私は彼女とその他の投獄されている人々の夫人たちとともにゆくことにする、看守たちをだますためにロシアの身分証明書を用意する、というのである。私が失敗することもありえた。しかし、私はその危険を冒すことを承知した。翌日、私は四人の婦人たちとともに出発し、連れだつて歩いた。彼女らの素足が、街路の円くならした小さな古い舗石や小石の上でねじれた。彼女らの二人が、手に入れることの難しい若干の食糧が入った布地の大きな袋を肩にかけて持っていた。最も若い、ヤルチュックの妻は、第一にツァーリズムを、ついでケレンスキー政府を倒すために、ペトログラードとモスクワのバリエードで闘ったのである。

監獄の入口では、女の見張り番が執務していた。彼女

は、私の友人たちを見知っていて、彼女らの訪問許可証をちらりと見ただけであつた。私は、一言もいわずに私の証明書を見せた。彼女は、ダア、といながらそれを私に返した。それに対し私は微笑で応えた。婦人たちのうち二人が何か私にはわからぬことを彼女に話しかけている間に、残りの人々と私はそこから遠ざかつた。

われわれは中庭を横切り、面会室に入った。同志たちは、われわれが面会したい囚人たちの名をいった。中にヴォーリンの名があつた。訪問者と囚人との間の仕切りは、ほとんど直接の接触を妨げなかつた。いかなる職員ないし警官も、会話を聞いていなかった。それが私に、われわれが問題にしているものが、証拠調べも法的根拠もない、行政上の拘禁であることを確認させた。

囚人たちが到着した。「ガストン・ルヴァルです」と婦人たちの一人がヴォーリンにいった。おおよそ四十五歳ぐらいの、中背の、黒いひげをたくわえた、ユダヤ知識人の立派な顔をした人物である。

彼は私の名を知っていた。というのも、人々が私のことをすでに彼に話していたからである。彼は、心から私の手を握り、きわめて純粋なフランス語で私に話しかけた。それから私は、彼を驚かし、いくらか奇妙に見えるのを怖れずに、というのも、私は絶対に公平無私な調査をしたから、ロシアに帰って以来の彼の行動について、きわめて正確に私に教えるよう彼に求めた。

綿密な正確さを伴う、一時間か一時間半の間、私がノ

ートをとっていた間、ウォーリンは、宣伝者と戦士としての彼の仕事を私に説明した。牢獄から牢獄へと引き渡され、ウォーリンは最後にブーチルキイに着いたのであった。彼は、その数奇な運命を、きわめて正確に私の物語り、事実と目付と名前と町とを列挙した。そして、他の被投獄者たちとともに、公然と裁かれることを要求していた。

……私は、ルクス・ホテルに戻り、私の同志たちの釈放のための闘いをつづけることを決めた。しかし、赤色労働組合インターナショナルの大会が始まった。われわれは、譲歩、約束、あるいは希望を獲ちとってはいいなかった。われわれはすでに、ソヴェト権力の代表者たちと五、六回も会っていた。そのたびに、交渉は何の成果もなしに破れるか中断された。疲れを待つ戦術がつづけられていた。

その時、ブーチルキイに投獄されていた同志たちが、ハンガー・ストライキを開始した。彼らは、フランス語で書かれた声明を発表し、その中で、すべての革命家にとつての釈放と思想表現の自由を要求するために、ロシア当局にとりなすことを、労働組合代表たちに求めていた。しかし、彼らが訴えかけた代表たちは、意気を持ち挫かれていて、彼らを精神的に悩ますこのストライキを遺憾に思うことしかしなかった。三日目、四日目、五日目と過ぎていった。大会では、私は何一つすることができなかつた。同僚の代表たちによって少数派とされ、そ

れまで余儀なくされていた地下活動のために、委員会や

舞台裏での掛引きや対抗策をとるという習慣もなく、私は、無為や無力に追い詰められていた。緊密な結びつきを保ち、その大多数が反対派であったにもかかわらず、フランス代表団もより以上のことはできなかった。われわれの同志たちは、ハンガー・ストライキをつづけていた。われわれは、オリョールで、私が名前を忘れたほかの諸都市で、似たようなハンガー・ストライキが行なわれ、二、三人のスト参加者が死んだ、と聞かされた。

ロシアのあらゆる半獄は囚人で溢れていた。インターナショナル参加者たちが、彼らの声がポリシェウイキ・ロシアの国境外に達するだろうという希望を抱きつつ、抗議しようという気になるのも、ありえないことではなかつた。彼らに、その他の何ができたであろう。

五日目、六日目、七日目。一、二の代表は、あえて孤立した交渉を行なつた。しかし空しかった。エマ・ゴールドマンとアレクサンドル・ベルクマンのうちで、私は、われわれの同志の夫人たちに会いつづけていた。彼女らは、身もだえし、苦しみに耐え、時には泣いていた。というのも、一晩たつと、夫たちの死刑執行を知らされることもありえたからである。オリガ・マクシーモフは、私に会いに大会にやってきました。そして、フランス語を知らず、私が今も耳にし眼に浮かべる哀願の口調と眼差しで、『同志ルヴァル、同志ルヴァル!』といながら、私の上着にとりすがつた。

七日目、八日目、九日目、十日目! われわれは胸を締めつけられていた。もはやどこに向いていったらいいのかわからなかつた。私は、反対派の代表たちの無力と落胆とに出会っていた。ある人々は、何一つすることができず、彼らの存在を利用し、彼らを困難な状況においたわれわれの同志たちを、ほとんど非難するまでになっていた。

遂に、十一日目、あの親しいオリガ・マクシーモフの無言の最後の嘆願に接し、私は、大会の最中に、二、三の代表団にトップ交渉をすることをどうにか決心させた。他の人々もつづいた。間もなく、われわれ、十人ばかりの人間がクレムリンに向かった。われわれは、ロシアの主人、レーニンと話すつもりであった。

クレムリンの城壁をくぐる城門の一つに到着して、われわれは衛兵隊にぶつかつた。われわれのうちの一人、ロシア語を話すミシエル・クネレルが、『タワリーシチ』レーニンに会いたいというわれわれの要求を述べた。われわれの名と代表する外国代表団の名が控えられた。電話がかかけられ、待った。十五分のうちに、望ましい答え。おそらくチェカーに属する二人の兵士が、われわれを迷路の中に導いた。われわれは、宮殿、豪華な私邸、リューリックの旧邸の礼拝堂の前を通りすぎた。レーニンのいる建物前で、われわれは別の衛兵隊に出会つた。彼らはわれわれが通るのを拒んだ。われわれは釈明した。彼らは命令を受けていなかった。改めて同志レ

ーニンに会見を求める別の書付けを書かねばならなかつた。レーニンは、かなり不備なフランス語で書いてきた別の書付けでわれわれに答え、その中で、われわれの訪問の目的を明示することを求め、仕事に追われているのでわれわれに会うことができないと詫びていた。われわれは、今度は全員で署名した、新しい書付けを書いた。われわれは、約十の外国労働組合組織を代表していた。それが、切札を計算する戦術家の心に圧力をかけることとなつた。戻ってきたチェカーの兵士は、われわれに会うというレーニンの最後の書付けを、やっと携えていた。われわれは二階に上らされ、その広間で、われわれは、立つたまま、かなり長い間、注意深く、緊張して待っていた。それから、われわれの背後で扉が開き、むしろ小さな、蒙古人に似た顔の、冷たい皮肉をまじえて微笑しつつ眼を細めた、レーニンが現われた。

一人ずつ、彼はわれわれと握手し、われわれの名と、どの代表団にわれわれが属しているかを尋ねた。彼が問うている間、われわれが答えている間、彼は、面白げなせんざくする眼差しをわれわれにそそぎ、面くらわせるような無遠慮さでわれわれの顔を穴の明くほど眺めていた。

ついで、彼は、隣の部屋に移り、大きな長方形のテーブルの周りの席につくよう、われわれを招じた。イギリスの労働組合代表で、われわれの中で最も知名の人物であるトム・マンが、レーニンの近くに坐り、彼の国語

で、われわれの訪問の目的を述べた。われわれは、ブーチルキイに拘禁されているわれわれの同志たちの自由のみではなく、左翼のすべての革命家たちの自由を要求することを決めていた。レーニンは、英語でわれわれのスピークスマンに答えた。マンは、知的な、微笑した、赤らんだ、立派な顔を向けて、それを注意深く聞いていた。最後には、頭でうなずいて、納得したように見えた。それから、クレムリンの主人は、彼の答えをフランス語に訳した。

彼は、ジェルジンスキーの非難をくり返し、われわれの交渉は正当な理由がない、とわれわれにいった。投獄されているのは、真のアナキストでも理想主義者でもなく、われわれの善意を悪用するならざるものである。その証拠は、ボリシェヴィキたちと協力している、公的な地位についているアナキストたち、本物のアナキストたちがいるということである。そして彼は、ヴォーリンに言及し、「マフノーとともにウクライナで列車を脱線させ、赤軍の何千という兵士を虐殺したのも、ボリシェヴィキに敵対するデニキン白色将軍と同盟したもの」だといった。

私は、この件についてはかなり正確な情報を持っていた。なにかんづく、事件が起きた当時ウクライナにいた、われわれの代表団とルクス・ホテルの一室で長い会見をした、赤軍の一將軍の証言があった。彼は、「マフノーは決してわれわれに敵対する白軍と同盟したことはな

った。ある時期、彼は、われわれとも白軍とも同時に闘った。しかし、彼が白軍に味方したということはできない」と明言していた。私は一方、オーストリア・ハンガリー軍や反革命の將軍たちから奪回した地域で、ヴォーリンが宣伝と文化組織を担当していたこと、軍事行動の指揮者ではないことを思いだしていた。そして、もしマフノーが赤軍と闘ったとしても、それは、ボリシェヴィキの独裁政治にしたがおうとしないウクライナ革命軍を、トロツキーが攻撃したからである。というのも、要するに、共産党は、革命諸党派の一つであって、他のものも、自己をすべてに押しつけようとする共産党の意志に対し、自衛する権利はあるからである。

私は、したがって、だしぬけにはなく、しかし明瞭さと確信をもって、レーニンをささげった。私は彼に、私はブーチルキイ監獄でヴォーリンと話した、「しかも私はそこに全く合法的な手段で入った」といった(レーニンは、《結構だ、それを疑いはしない》といった仕種をした)。私は、投獄されている私の同志の活動について私が知っているすべてを、一つ一つ、くり返していった。私は、十五分間話をし、日付を示し、事実と名前とをあげた。レーニンは、眼を細め、やや鼠のような印象を彼に与えている顔を長くし、物珍しげに私を見つめながら、注意深く私の話を聞いていた。私が話し終えた時、彼ははつきりと狼狽していた。しかし、打撃を受けていることを示すにはあまりに狡猾な彼は、気を落ち着

かせる時間を持つために、言葉を集め、ゆっくりと語りだし、遠回しな表現を口にした。

……いかに、もちろん……もし事態があなたのいった通りなら、問題は違った形で提起される……私は、ヴォーリンについての情報の補足を要求しなければならぬいだらう……私はきわめて重要な細部を知らなかった……。

彼は、足踏みをつづけていた。というのも、彼にとつては、立場を譲らないことが問題であったからである。彼の考えはちゃんとわかっていた。あいつめ！ 結局、彼は間に合わせをいい始めた。

「諸君は、今日われわれがきわめて特殊な状況におかれていることはご存じだ。昨日は革命的であった人々も、反革命的になった。そして、われわれは彼らと闘わねばならぬ。ロシアでの社会主義の創始者、ブレハーノフを見られたい。彼は、スイスからロシアに発するわれわれの同志の一人に、《あの害虫を粉砕する必要がある！》といった。ボリシェヴィキ国家は、これらの新しい敵と闘わねばならない。国家は、われわれが責任を負っている機構であり、それが機能するのを人が妨げることを、われわれは許しておくことができない。ヴォーリンは、きわめて聡明だ。だから、彼は最も危険であり、われわれは、彼に対して最も徹底した措置をとらなくてはならない。なぜなら、そうではないかね、マフノーとともに、彼は赤軍兵士の乗っていた列車を脱線させ、彼

は白軍の將軍たち、デニキンやコルチャックと肩を組んだのだから」

他の代表たちは、私よりもそのことを知らなかったし、議論に加わらなかつた。というのも、彼らはある種の事実によく通じていたし、国境で《白衛軍》によって虐殺される危険なしに、異議を唱えることはできない、と知っていたからである。彼らは、すべての革命的傾向にとつての表現の自由と政治囚全般の釈放の問題を討議するよう、直ちに仲に入った。彼らが話している間、レーニンは、トム・マンに対してしたように、私が話していた時したように、いつも皮肉に、面白げに、彼らの顔を穴の明くほど見、禿げた頭と小さなひげを、下から上へ、上から下へと動かしていた。そうかと思うと、手で右の頬を支えて、彼は天井の凝視に余念がないように見えた。調子を狂わされ、自分の懇願の無益さを理解したので、自由と人間性の擁護者は、結局、話を途中で打ち切るか省略した。

会見は三時間近くつづき、その最後に、レーニンは、革命的反対派の諸権利の問題にはできない、とといった。それは、おそらく政治局の同志たちによって拒否されるであろう。ハンガリー・ストライキの参加者の事情を検討することはできない。しかし、彼には何一つ決定することはできない。政治局にゆかねばならない。しかも、彼はそこで彼の見解を強制することはできない。なぜなら民主的に、決定を下すものは過半数だから

である。
 レーニンに嘘をいいた。われわれは、無遠慮に破れないために彼の虚言を信するふりをした。そして、彼の頼みによって、私は、われわれは《同志レーニン》に、ブーチルキイ監獄でハンガー・ストライキをつづけている人々の釈放についてのわれわれの要求を、委託したという書付けを書いた。ブーチルキイ以外の人々は問題にされなかった。レーニンは、フランス代表シロールの部屋に、翌日十時に返事が届くようにする、とわれわれに約束した。そしてわれわれは、せんざくするような、皮肉な最後の眼差しを浴びて、最後の握手をしたあと別れた。

翌日、返事は正午にしか届かなかった。それは、何一つよいことがないことを予測させた。レーニンによってではなく、責任を負う上でかなり率直な、トロツキーによって署名されていた。ハンガー・ストライキ参加者の釈放は、明確に拒否されていた。ただ一つ期限付きの提案があった。彼らのロシアからの国外追放である。革命の高度な利益が危機に瀕している時、皮相な感情に譲歩するのではなく、革命的責任を考慮することを教えることはぜひとも必要であるという、意見にしたがって、とことである。

受け入れる以外の何ができるであろう。われわれは、すでに会った、そして疑いなくもう会いすらしないであろう、高官たちに対して交渉を再開することはできな

った。そして、それがわれわれの同志たちの立場を悪くすることもありえた。われわれは、彼らに提案された解決策を伝えさせた。彼らは牢獄からだされるであろう。それは実際の成果である。彼らは彼ら自身の国から追放されるであろう。それはまったく象徴的なものである。

他の四人たち、他の党派に対しては、われわれはもはや何一つできなかった。

大会は、数日のちに終わった。代表たちはモスクワの街頭にでた。われわれは、劇場での催しに招待された。ジャリアピンはわれわれのためにオペラで歌った。パレの舞台やモスクワ河のほとりでの素晴らしい競技の祭典も見せられた。少数の代表たちは記録をとっていた。しかし、二週間が流れたのに、われわれの同志たちはやはり獄中にいた。それは、彼らを釈放しロシアから、何人かの人々がツァーの時代に逃げださねばならなかった、そして革命が勃発した時に希望に満ちて帰ってきた、このロシアから追放することを明示した、諸代表団とルナチャルスキーの間で調印された、協定に反していた。われわれは、ポリシエウイキの指導者たちの言葉を信用していなかった。われわれは、彼らの不誠実を知っていた。そしてわれわれは、やはりじりじりしているわれわれの同志たちを獄中にとどめておくため、われわれの出発を待っているのではないかと、と自問していた。しかし、トロツキーが、フランス代表団に、ある晩、

シロールの部屋に友好的な訪問をするのと知らせてきた。イタリアとスペインの労働組合員たちが先に来ていた。われわれは、調印した協定実施についての詳細を尋ねるため、この機会を利用することを決めた。知的で、精力的で、尊大な、美丈夫、トロツキーが到着し、われわれの中央に坐り、白軍の將軍たちに対して進めている闘いのさまざまな様相、新しいロシアが通過しつつある経済的難局について語った。われわれには恐るべき危険と見える官僚主義について、彼は、できるなら、官僚の船全体をかついで、躊躇なくそれを海に沈めるだろう、といった。しかし、問題はそれほど簡単ではない。彼は、遺憾の意を示した。阻止することはできないのであった。

フランスにおける革命運動、CGTの動向、西欧の労働運動指導者の裏切りといった、別の問題が取り上げられた。同意はほとんど完全であった。なぜなら、トロツキーは、彼の説得的な議論と彼の説明に当たったのいいし、心の中では、魅了することができたからである。しかし、心の中では、われわれは皆、最も気にかかっていることを話題にする機会を待っていた。彼は、それを見抜いてくるように見えた。というのも、彼はとどまることなく、この上なくさまざまな問題を話していたからである。彼が引き上げようとしたので、われわれは、おそらく彼が避けたいと思っていることを取り上げた。

彼は、眉をひそめ、半ば微笑し半ば怒りを見せ、獄中のロシア・アナキストたちのためのわれわれの介入を話

題にしてこの会見を台なしにしない方がいい、それはわれわれがロシアでする最善のことではない、それは帰国した際われわれの国の労働者に対してわれわれが自慢すべきことではなからう、われわれはだまされている、われわれの第一の義務は、ソヴェト政府を信用することではなくてはならない、と答えた。それから、調子を変えて、はつきりと不自然な笑いを浮かべていた代表たちの前で、怒りを抑えて、彼は、約束は守る、と保証した。それは、あまりにも曖昧に見えた。そこで私は、アルランデイスに援けられて、いつ約束は果たされるのか、われわれの同志たちはいつ牢獄からでられるのか、尋ねた。

その時私は、トロツキーが胸を張って居丈高になり、拳を握った腕を振りあげ、怒りを爆発させて、ほとんどわめき立てながら私に質問するのを見た。

「私に、あなたを知らない私に、私が行なった決定をいつ実施に移すか尋ねる、あなたは何者なのだ」

それから、私の背広の折返しをつかんで、彼はやはり同じ調子で付け加えていった。

「われわれが革命をやった。われわれポリシエウイキが、だ。諸君、諸君は何をしたかね。われわれに命令するのは諸君ではない。われわれは、諸君から命令を受ける必要はない！」

私はもう、彼がほかのどんなことをいったか覚えていない。私は、即座に答えることもできなかったほど余裕

を奪われ、不意をつかれて驚き、憤激によって茫然とさせられた。私は、蒼ざめていると感じさせた。それから平静に、

「あなたはそんな調子で答えるべきではない、同志トロッキー。われわれはあなたに質問をする権利は持っている！」

といった。

他の代表たちが仲に入り、彼を落ち着かせようとした。トロッキーは、約束は守る、とくり返した。

出発前に、私は、まだ自由であった多くの同志たちに別れを告げた。彼らは皆、牢獄か、強制収容所の前触れである隔離所の中で死ぬこととなった。私は、遂にブーチルキイ監獄から出たヴォーリンとその仲間たちとも握手をした。そして、私はリガ経由でベルリンに向けて発った。

世界的な虐殺のあとで、われわれには国際プロレタリアートと人類の解放の曙光と見たあの革命が、今ではわれわれには、民衆の将来にとって最大の危険の一つと見える。組織化された警察のテロル、党による全社会生活押収の拡大、ボリシエウイキ以外の、あらゆる傾向の、あらゆる党の、あらゆる流れの組織的な絶滅、新しい主人とは違った思想を持つあらゆる革命家のやはり組織的な駆逐、党内での非画一主義のあらゆる動きの禁止、それらすべては、中世の最悪の時期を思いださせる、政治的のみならず、知的な、精神的な、道徳的な、

新しい独裁政治に向かって、われわれが歩んでいることを証明していた。

1 Joaquin Maurin (1897—) まずカタルニャ共産主義

者連合の、ついでそのモスクワとの不和ののち、労働者農民同盟(一九三二年)の、ついで一九三五年におけるマルクス主義統一労働者党(P.O.U.M.)の、創立者。同時に小学校教師、CNT内の組合活動家。ブリーモ・デ・リベラの下で、ついでフランコの下で、十五年間を牢獄で過ごす。アメリカ合衆国で暮らしている。

2 Felix Dzerjinsky (1877—1926) 貴族出身、一八九五年以来リトアニアの社会民主主義者、何度も逮捕され、刑を受け、一九一七年の革命によって徒刑場から解放される。チェカー、ついでゲーバーウーとなった、政治警察の創立者。心臓の発作で死ぬ。

3 Anatole Louatcharsky (1873—1933) 作家、文芸批評家、一八九八年以来社会民主主義者、一九〇三年にボリシエウイキ、一九一七年から一九二九年まで文部人民委員。ウルリッチは、スターリンによる肅清期に銃殺されたらしい。

4 Maria Spiridonova (1889—) テロリスト活動家、地方の知事を死刑に処したため死刑を宣せられ、無期徒刑に減刑される。シベリアへ送られる間、辱しめを受け、拷問される。一九一七年二月以後、左翼社会革命党の指導者。一九一八年七月のその反乱に参加。一九一九年か一九二〇

年に投獄され、以後決して釈放されなかった。

6 Olga Maximoff は G. P. マクシーモフ(二一八ページを見よ)の妻。

7 Michel Kneller は、一九一九年頃、ソヴェト・ロシア封鎖に抗議して、エリゼ宮に連発ピストルを射ち込んだ、フランスの活動家。赤色労働組合インターナショナル創立大会へのフランスCGTの代表。サンジカリストのな気持を伴った、共産主義者のシンパ。その後、左翼の△利権屋。

8 Rurik はロシア帝国の創立者。八七九年に死ぬ。
Ton Mann (1896—1941) イギリスの機械工、一八九四年に独立労働党の書記。IWW(アメリカの革命的サンジカリスト組織)に参加する。一九二一年のイギリス共産党

創立に加わる。

10 Plekhanoff については五〇ページを見よ。

11 Henri Strolle (1886—) 一九二〇年に鉄道員連合の書記の一人になる。移り気なアナルコ・サンジカリスト。一九二二年七月のサン・テチエヌヌでのCGTU第一回大会で、一九二一年のモスクワへの彼の代表団の報告をし、レーニンと会い、レーニンからアナキストたちの若干の訴訟記録を見せられたと語り、彼、シロールは、彼らは死に価値があると結論した! ベタン元帥の(対独裁の捕虜)国民救済会の指導者で終わる。

12 ガストン・ルヴァルと同行した、スペイン労働組合代表の一人。